シーボルト来日 200 周年記念　神田佐野文庫企画展

賀来佐之と伊藤圭介
―二人の門人―

展示目録

2023（令和５）年 12 月 12 日（火）～21 日（木）

神田外語大学附属図書館

ご挨拶

神田外語大学附属図書館では、京都の古書肆・伏見春和堂主人故若林正治氏（1912～1984)旧蔵の洋学資料、佐野学園神田外語グループ会長、故佐野隆治氏（1934～2017)が収集された日本関係洋書を一括して、神田佐野文庫と名付け、新たな収集資料も加えて、利用公開を進めております。

2014 年 12 月、本学日本研究所長町田明広先生が若林氏収集の洋学資料を整理中に、シーボルト自筆書簡を発見されました。宛名は豊前出身の門人「サイチ」こと賀来佐之（かく・すけゆき）。同じく門人でリンネの植物分類体系を最初に紹介した植物学者伊藤圭介の盟友でした。しかし、のちに理学博士第１号となった伊藤圭介に比して、地方医療に尽くし島原藩医として生涯を終えたため、最近までその業績は忘れ去られてきました。

若林氏がシーボルト編「日本植物目録」の筆写本を、それと知らずに入手されたのは、第三高等学校で化学、生物を学ばれたことと関係があるでしょう。その筆写本に、シーボルトの日本植物研究の実態を伝える、この書簡が挿入されていました。

今年はシーボルト来日 200 周年に当たります。これを記念して、賀来佐之あてシーボルト書簡を中心に、神田佐野文庫から関係資料 10 点を選び、賀来佐之にかかわる写真パネル 16 枚を合わせて、企画展「賀来佐之と伊藤圭介ー二人の門人ー」を開催します。蘭学の背景、出島での交流から始まる二人の軌跡をたどっていただければ幸いです。

大分県立歴史博物館、日出町歴史資料館・帆足萬里記念館には、写真パネルの画像データ提供、資料撮影でお世話になりました。武田科学振興財団杏雨書屋は賀来佐之肖像写真の利用をご許可下さいました。ルール・ボーフム大学東アジア学部には、参考パネルのために、同学部所蔵シーボルト・アーカイブ資料の画像データ利用をご許可いただきました。また関係諸機関・各位からご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

令和５年（2023）12 月

神田外語大学附属図書館

賀来佐之と伊藤圭介ー二人の門人ー

日本研究所客員教授　松田　清

西欧の東洋学と日本の蘭学

ドイツ人医師シーボルトは 1823 年、27 歳のとき長崎のオランダ商館付き外科医として赴任し、1829 年まで 6 年間、日本に滞在しました。1820 年代は西欧では植民地支配と連携した近代的な東洋学の草創期でした。1822 年、パリで東洋学会（Société asiatique)、1824 年、ロンドンで王立アジア学会（Royal Asiatic Society)が創立され、1828 年設立のロンドン東洋学翻訳基金(Oriental Translation Fund)は「光は東洋から」（Lux Ex Oriente）を標語に東洋文献翻訳シリーズを出版しましたが、日本学はほとんど未開拓の分野でした。日本の北方はオーストラリア南方とならんで地球上で残された最後の未知の海域でした。

日本ではこの時代は蘭学の発展期にあたり、オランダ語を相当程度読み書きできる蘭学者が出現。蘭学はオランダ領東インド（現在のインドネシア海域）の植民地研究機関バタヴィア学芸協会を介して西欧の知的世界と繋がっていました。

シーボルト来日の目的

シーボルト来日の目的は二つありました。ひとつは公的なもので、バタヴィア（現在のジャカルタ）のオランダ領東インド植民地総督の特命による博物学的調査と民族誌的調査でした。博物学と民族誌は地理学とならんで、植民地科学の基礎でした。シーボルトはそのために、総督から巨額の財政的支援を得ていました。知識欲旺盛な多数の日本人協力者（多くはオランダ語を解する青年医師）は門人として伝統的な師の礼をもってシーボルトを遇しました。

もうひとつは私的なもので、植民地支配の発展とともに博物館ブーム、園芸ブームに湧いていたヨーロッパへ、未知の日本の文物をもたらし、成功を収めることでした。そのための膨大な日本コレクション形成には、商館員に認められた私貿易からの利益を投入しました。

日本植物目録の編纂

シーボルトは日本の博物学的調査をこのような構想のもとに進め、日本植物研究のために、協力者を求め、標本収集と目録編纂に精力的に取り組みました。日本滞在中に植物目録編纂に最大の貢献をしたのは、シーボルトも認めているように、尾張本草学の指導者水谷豊文（助六）の門人、伊藤圭介でした。

シーボルトの要請を受けて文政 10 年（1827）9 月長崎に到着した圭介は、名古屋からもたらした 1600 種以上の標本をもとに、シーボルトとラテン語の学名・和漢名の交換授業をしました。シーボルト塾の塾頭岡研介が通訳し、1 年前から入門していた豊前出身の先輩で、日出藩儒医・帆足萬里の愛弟子、賀来佐之が筆記役をつとめました。

忘れられた賀来佐之

半年後、圭介が帰郷したため、その後は佐之が協力を続け、目録はほぼ完成しましたが、シーボルトがこだわった漢名は不十分でした。日本植物の漢名知識は西欧の東洋学に貢献するはずでした。神田佐野文庫から発見された賀来佐之あてシーボルト書簡は、帰国の出帆予定日が迫るなか、漢名解説を是非とも完成するよう督促するものでした。

1830 年にオランダに帰国後、シーボルトは今度は J.J.ホフマンを助手として、日本で伊藤圭介、賀来佐之の協力を得た植物目録の改訂作業を急がせました。そのとき役だったのが、圭介の提供した植物標本と、「ある日本人学者」の作成した漢名解説でした。ホフマンは 1841 年の末頃、シーボルトから、この解説を与えられ、日本植物目録の改訂稿を完成させることが出来ました。

シーボルトと仲違いし、独立した日本学者となったホフマンは、パリ東洋学会報『ジュルナル・アジアティク』1852 年 10・11 月号に植物学者 H.スヒュルテスと共著で『日中植物名彙』を発表しました。そこに水谷助六、伊藤圭介の名はあれど、賀来佐之の名はありませんでした。1855 年、ホフマンはライデン大学に設置された西欧最初の日本学講座の教授に就任しました。

ホフマンのいう「ある日本人学者」はシーボルトの佐之あて書簡によって、佐之であることが判明しました。シーボルトが佐之の名をホフマンに告げていれば、学者ホフマンは名前を引用したはずです。

展示資料目録

第１部　忘れ去られた門人・賀来佐之　ーパネル展示ー

１　賀来佐之肖像　昭和初期模写
『杏雨書屋所蔵　医家肖像集』（武田科学振興財団、2008）より転載

寛政 11 年（1799）～安政４年（1857）11 月 18 日没、５９歳。島原藩医。シーボルト門人。字は公輔、通称佐一郎、号は百花山荘、諡号は毅篤先生。

島原藩領、豊後高田の医師賀来有軒（1768～1817）の長男に生まれる。父有軒は儒医三浦梅園に師事し、京都に出て小野蘭山に本草学を学ぶ。

佐之は 14 歳から９年余り、日出藩儒・帆足万里の私塾で窮理学と医学を学ぶ。異母弟、飛霞（睦三郎・睦之、1816～1894）を親代わりに訓導。

文政９年（1826）９月、長崎留学。通詞吉雄権之助からオランダ語を学び、シーボルトに師事。

文政 10 年（1827）９月から翌年１月中旬まで、出島で伊藤圭介、岡研介とともにシーボルトの日本植物目録作成に協力。その後も８月頃まで協力を続けた。シーボルト事件発覚（10 月）後も、同年末まで長崎に滞在した。

天保２年（1831)、ウィルデノウ『植物学入門』の翻訳「本草新書」に着手。

天保 13 年（1842）春３月、島原藩医。

２　毅篤先生行状　第三稿　安政５年（1858)　賀来睦之（飛霞）筆
大分県立歴史博物館寄託

毅篤先生行状　第三稿

先生諱佐之。字公輔。姓賀来氏。其居号百花山荘。前豊佐田人。考有軒先生。妣日野氏。先生其長子。寛政[十一年]己未。生於高田僑居。年甫十四五。受業於帆足[萬里]夫子。十五喪先妣。事後母鈴木氏。如所生。十九先人又棄世。夫子憫之。教育備至。（…）丙戌[文政九年]西遊長崎。受蘭学於吉雄[権之助]訳司。会矢伊勃児杜[シイボルト]来。蘭方始盛。居四年帰専倡蘭方。乞治者満門。蓋二豊為蘭方之発首。（…）天保[五年]甲午春欲講其所学於上国。東遊於京師及江〈仁正寺（藩)〉留五年西帰。夫子嘗以為外感転変之病。宜漢方。内傷一部之症。宜蘭方。今医宜兼漢蘭医法。於是先生亦奉其説。術益精。（…）時本藩聞其善医。賜十人之餼。召講所著医原於済衆館。[天保

十三年]春三月也。明年[十四年]癸卯冬為医師惣領分。兼主宰官園種蒔之事。始闢薬圃於済衆館側。後大墾闢于城南。弘化[三年]丙午。有島原舟師漂流至于北亜墨利加還者。先生与儒臣田中某[田中基文]。奉命撰漂流記若干巻。松代侯[真田幸貫]乞借覧。官更命校正。有恩賜。(…)進秩医師次席為匙師。恩遇甚厚。安政[元年]甲寅罷匙師復為医師惣領分。[嘉永二年]己酉秋蘭医始齎来牛痘種。官命市内泰朴及先生受其法於蘭医以徧施国中。先生少履清苦博覧群籍。賦詩属文能弁疾病所由生。尤邃於本草。薬論甚精。幼学画於[片山]九畹翁。可観。後復不作。交際無隠情。不咎既往。不為蓄積。以是家貧。泊然不憂。曰世間事多不如意。雖徒憂。何益。為人治病。不拘泥法能察機為奇中。以精良聞。晩節自曰随意攻撃未嘗誤治也。絶無他玩弄。唯酷愛花卉。自植百花。逍遙其間。吟詠自楽。遂以百花為号。欲兄弟与之。移島原亦不改其号。帰省嘆故旧物故。唯慕其山色。佐野[博洋]大夫嘗問先生曰。子在郷何楽。対曰居近山。枕頭有円窓。春暁聞雉声甚楽。大夫感其風致。弘化中与[米良]東嶠先生。採薬于日光山。先生有記。能尽毅篤先生之情態。[安政四年]丁巳冬十一月病乞骸骨。官更賜三人之餼。将以十五日帰而十日夜疾病。遂以十八日卒于島原。寿五十九。卒之四日葬城西本光寺。私諡曰毅篤先生。今茲[安政五年]戊午四月帰葬其遺髪于佐田先塋。(…)著書有新注傷寒論。陽明二編。本草新書。多識図譜。各若干巻。医原。後世方意解。治痢書。治痘新書。犬岳求菩提山由布岳日光東海採薬記各一巻。救荒本草写生図。墨識古漂流記及所訳。前筑孫太郎漂流記。抜丹無人島日記。小田江史。蒲生江史。詩文稿等。受業者以十数往々有傑出之徒。[帆足]夫子見先生如子。先生仰夫子亦如父。見異母弟睦之如子。教育恩愛甚厚。東西相奔走。四十二年間兄弟同居四五。其久者不過五年。愧不能事之如父。遺憾不歇。追懐叙列其行事。懼或乖謬。有虧其徳。不肖弟睦之謹状。

(本文書き下し)

先生諱は佐之、字は公輔。姓は賀来氏なり。其の居号は百花山荘。前豊佐田の人なり。考は有軒先生。妣は日野氏。先生は其の長子なり。寛政[十一年]己未。高田の僑居に生まる。年甫めて十四、五、業を帆足[萬里]夫子に受く。十五にして先妣を喪う。事後母鈴木氏、所生の如し。十九にして先人又た世を棄つ。夫子、之を憫み、教育すること備至なり。(…)丙戌[文政九年]長崎に西遊す。蘭学を吉雄[権之助]訳司に受け、矢伊勃児杜[シイボルト]の来たるに会う。蘭方始めて盛なり。居ること四年、帰りて専ら蘭方を倡う。治を乞う者門に満つ。蓋し二豊に蘭方の発首為り。(…)天保[五年]甲午春、其の学ぶ所を上国に講ぜんと欲す。京師に東遊し江〈の仁正寺(藩)〉に及ぶ。留ること五年にして西帰す。夫子嘗て以為えらく、外感転変の病は、宜しく漢方たるべし。内傷一部の症は宜しく蘭方たるべし。今の医は宜しく漢蘭の医法を兼ぬべし、と。是に於て先生も亦た其の説を奉ず。術、益々精し。(…)時に[島原]本藩、其の善医たるを聞く。十人の餼を賜い、召して著す所の医原を済衆館に講ぜしむ。[天保十三年]春三月なり。明年[十四年]癸卯の冬、医師惣領分と為る。兼て

官園種蒔の事を主宰し、始めて薬圃を済衆館の側に闢く。後ち城南を大いに墾闢す。弘化[三年]丙午。島原の舟師漂流して北亜墨利加に至り還る者有り。先生、儒臣田中某[田中基文]とともに、命を奉じて漂流記若干巻を撰す。松代侯[真田幸貫]借覧を乞う。官、更に命じて校正せしむ。恩賜有り。（…）秩医師次席に進み、匙師と為る。恩遇甚だ厚し。安政[元年]甲寅、匙師を罷り復た医師惣領分と為る。[嘉永二年]己酉秋蘭医始めて牛痘種を齎し来たる。官、市内泰朴及び先生に命じて其の法を蘭医に受け、以て徧く国中に施さしむ。先生少くして清苦を履み群籍を博覧す。詩を賦し文を属し、能く疾病の由りて生ずる所を弁ず。尤も本草に邃たり。薬論甚だ精し。幼くして画を[片山]九畹翁に学ぶ。観る可きあるも、後ち復た作らず。交際に隠情すること無し。既往を咎めず。蓄積を為さず。是れを以て家貧し。泊然として憂えず。曰く、世間は事多く意の如くならず、徒らに憂うと雖も、何の益かあらん、と。人の為に病を治す、法に拘泥せず能く機を察し、奇中を為す。以て精良の聞あり。晩節自ら曰く、随意に攻撃するも未だ嘗て治を誤らざるなり。絶えて他の玩弄無し。唯だ酷だ花卉を愛す。自ら百花を植え、其の間を逍遙す。吟詠して自ら楽しみ、遂に百花を以て号と為す。兄弟の之に与せんことを欲す。島原に移るも亦た其の号を改めず。帰省して故旧物故を嘆じ、唯だ其の山色を慕うのみ。佐野[博洋]大夫、嘗て先生に問うて曰わく、子、郷に在りて何の楽しみかある、と。対えて曰わく、近山に居し、枕頭に円窓有り、春暁雉声を聞き甚だ楽しむ、と。大夫、其の風致に感ず。弘化中、[米良]東嶠先生と日光山に採薬す。先生に記有り。能く毅篤先生の情態を尽す。[安政四年]丁巳冬十一月病、骸骨を乞う。官、更に三人の餼を賜う。将に十五日を以て帰らんとす。而して十日夜、疾病なり。遂に十八日を以て島原に卒す。寿五十九。卒の四日、城西本光寺に葬す。私に謚して毅篤先生と曰う。今茲[安政五年]戊午四月其の遺髪を佐田の先塋に帰葬す。（…）著書に新注傷寒論、陽明二編、本草新書、多識図譜、各若干巻、医原、後世方意解、治痢書、治痘新書、犬岳・求菩提山・由布岳・日光・東海採薬記、各一巻、救荒本草写生図、墨識古漂流記及び訳す所、前筑孫太郎漂流記、抜丹無人島日記、小田江史、浦生江史、詩文稿等有り。業を受くる者十数を以てす、往々傑出の徒有り。[帆足]夫子の先生を見る子の如し。先生の夫子を仰ぐも亦た父の如し。異母弟睦之を見る子の如く、教育恩愛、甚だ厚し。東西相い奔走す。四十二年の間、兄弟同居するは四、五。其の久しき者も五年を過ぎず。之に事うる父の如くする能わざりしを愧ず。遺憾、歇まず。其の行事を追懐叙列す。或は乖謬して其の徳を虧うこと有るを懼る。不肖の弟睦之、謹しんで状ぶ。

3　賀来佐之履歴草稿　賀来飛霞筆　明治 14 年か

大分県立歴史博物館寄託

亡兄佐一郎（名佐之字公輔）、幼ヨリ〈本草〉亦赭鞭学ヲ嗜ム、曾テ〈長崎〉瓊浦二遊

ビ、伊藤先生ト同窓莫逆ノ友タリ、爾後〈チ〉肥ノ島原ニ筮仕シ、藩主ニ従テ東行スルヤ、尾ノ宮駅ヲ経テ、先生ヲ名護屋[ニ]訪ヒ、旧ヲ話シ、共ニ嗜ム所ノ多識ヲ交換シ、款ヲ尽シ、〈爾〉後亦肥尾東西相距殆ト二百里、前後書牘ヲ往復スル卅四年ナリシ、安政[五年]戊午、先生勢ノ菰野ニ採薬シ、帰途桑名駅ヲ経ルノ際、偶然島原藩主ノ宿スルニ会シ、人ヲ令シテ其医員ニ佐一郎ノ動静ヲ問ハシメ、其既ニ即世セシヲ聞[キ]愾然悽愴最深カリシトゾ、余ヤ亦弱冠尾ニ遊ビ、先生ニ謁シ、示教ヲ辱フス、後雁書互ニ往来スト雖トモ連牀剪燭、談笑交歓スルヲ得ザルヲ遺憾トス、晩節偶〈然〉東京ニ来リ、邂逅親炙相娯ム亦好因縁ト謂〈ハザルヲ得〉ツベシ、年（トシ）有リ、先生能余兄弟ヲ尽シ、余固ヨリ先生ヲ尽ス能ハズト雖トモ頃日先生ヲ余ニ問フ者アリ、因テ文辞ノ鄙陋ヲ顧ミズ、竊ニ知ル所ヲ記シ、且伊藤家記録及ヒ辞令書ニ拠リ、履歴ヲ考ヘ、係ル二年月ヲ以テシ聊カ責ヲ塞クト云

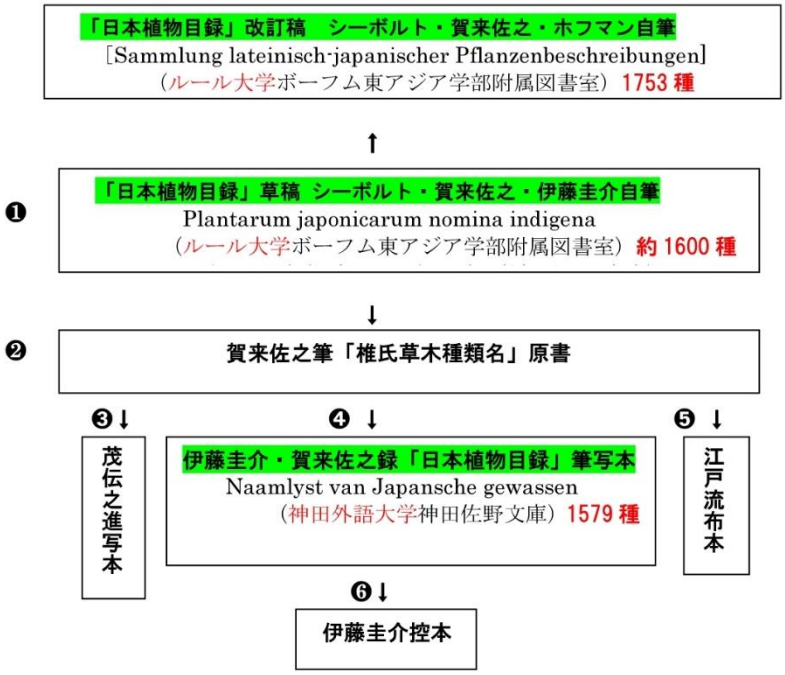
４　シーボルト礼状　賀来佐之の弟（睦三郎、飛霞、13 歳）宛　182[8]年 9 月 5 日付　佐一郎（佐之）訳　　大分県立歴史博物館寄託

尚々佐一郎儀は、私門人中ニ何事モ甚巧成者ニ
　而御座候
尊兄佐一郎（僕はシイボルト門人故書棄也、左様御承知可被下候）を以毎度押葉并ニ生写之絵〈御贈被下〉預御恵投罷申候、大ニ御心配之〈段〉程不浅忝奉存候、学問御心懸之段、是復承知仕、御一段奉存候、依而御慰之為ニ箱入之指金進上之仕候、御笑留可被下候、何とも申上兼候共、川鼠壱貳疋御捕、御贈被下候様奉頼候、最焼酎ニ漬ニ被成様ニ奉頼候　以後無御見棄、御召使同様召被下候は、可為本懐候、已上
医官シイボルト
　和蘭紀元一千八百二十［八］年九月五日
佐一郎訳

（本文の現代語訳）
尊兄佐一郎（僕はシーボルトの門人なのでこれは反古です、そのように御承知ください）を介して毎度、腊葉と写生図の御恵投にあずかっております。大いに御苦労のほど浅からず、かたじけなく存じ上げます。学問を心がけておられること、これまた承り、一段とお励みのことと存じます。そこでお慰みのため、箱入りの指輪を進呈いたします。ご笑納下さいますよう。なんとも申し上げにくいのですが、川鼠を一二匹捕らえてお贈り下さいますようお頼みします。それも焼酎漬けになされますようお頼みします。今後もお見捨てなく、召使い同様にお命じ下されば、本懐に思うこと間違いありません。以上
　なお、佐一郎は私の門人中で、何事においても大変な巧者であります。

5　シーボルト編「日本植物目録」関係年表・写本系統図

文政 10 年 9 月 9 日(1827 年 10 月 29 日)
　伊藤圭介、長崎到着。翌年 3 月まで長崎に滞在。出島で、シーボルト門下、兄弟子の賀来佐之とともに、日本植物目録作成に協力。
文政 11 年（1828)
　1 月～3 月　「日本植物目録」草稿❶成る。
　3 月　佐之、「椎（しい：シーボルト）氏草木種類名」原書❷作成。
　　圭介、シーボルトからツュンベリー『日本植物誌』受贈。帰郷。
　　佐之、「日本植物目録」改訂作業をシーボルトとともに開始。
　5 月 7 日（1828 年 6 月 18 日）シーボルト、「日本植物目録」写本❸に序文を付け、通詞茂伝之進に贈る。学名と和名の欄、ほぼ完成。
　8 月 23 日　シーボルト、出帆予定日。　（翌日、２度目の台風来襲）
　10 月 10 日　江戸で高橋景保逮捕。この日、佐之、「日本植物目録」神田本❹を圭介へ発送。
　シーボルト、佐之あて蘭文書簡（督促状）を送る。圭介『泰西本草名疏』校訂。
　11 月 1 日　高橋景保逮捕（10 月 10 日）情報、長崎に届く。
文政 12 年 1 月　　シーボルト、出島に拘留。
　　12 月 9 日（1830 年 1 月 3 日）　シーボルト離日、バタヴィアへ向かう。
文政 13 年 5 月 11 日　圭介、「日本植物目録」神田本❹を佐之に贈る。



６　日本植物目録　改訂稿（1841 頃）　ボーフム・ルール大学蔵
Source: The Siebold Archive, Faculty of East Asian Studies, Ruhr University Bochum, Germany ; shelfmark 1.180.000　f. 17verso – f. 18recto.

（Ａ紙・冊）と（Ｂ紙・冊）をシーボルトの助手ホフマンが交互に重ねて合綴。

７　賀来佐之あてシーボルト書簡と「日本植物目録」改訂稿
賀来佐一郎（佐之）あてシーボルト自筆蘭文書簡　裏面　1828
神田外語大学附属図書館蔵

【シーボルトの督促１】
植物目録はノート 14 冊分を受け取りましたが、どうか努めて目録を完成させるようにして下さい。他のノートはどこにあるのでしょうか。

ノートとは改訂稿（Ａ紙・冊）のこと
和名ローマ字（シーボルト筆）
学名（シーボルト筆）　和名カナ書き　（賀来佐之筆）

【シーボルトの督促２】
私がすべての文字(漢字・仮名)を理解できるようにした解説はどこにありますか。

シーボルトの助手ホフマンはこの解説（賀来佐之作成の漢字・仮名)資料をもとに、改訂稿（Ｂ紙・冊）の漢名・和名カナ書き・植物記載略号（ホフマン筆）を作成

【シーボルトの感謝】
これまで大変お世話になり、誠にありがたく感謝致します。

【果たされなかった約束と帰郷延期の要請】
(貴殿のことは)決して忘れませんのでご安心下さい。幸いにも祖国を再び見ることができたら、すぐに、そして命のある限り、立派で忠実な教え子たちのことを思い、オランダの地から、学問に対する彼らの情熱を促進するようにします。
永遠に貴殿の誠実なる師
1828 年 フォン・シーボルト
深い友情からのお願いです。私の仕事を終える前に出発しないように。

８　シーボルトの賀来佐之・伊藤圭介評価

シーボルト「日本植物目録」　茂氏本㋝序　１８２８年６月１８日　出島
伊藤圭介「シーボルトへ所贈腊葉目録」（国立国会図書館蔵）
https://dl.ndl.go.jp/pid/2542957/1/5

シーボルトが阿蘭陀通詞茂伝之進に贈った「日本植物目録」写本❸の序文を伊藤圭介が転写

【和訳】

茂氏本㋝序

学識あるカツラガワ・ホケン（桂川甫賢）、ウダガワ・ヨアン（宇田川榕菴）、ミズタニ・スケロク（水谷助六）、イト・ケイスケ（伊藤圭介）、Ｏ・ソンシン（大河内存真）、Ｏ［ママ］・ サイチロ（賀来佐一郎）、コー・リョサイ（高良斎）、m.ジュンゾー（美馬順三）、 Ｔ・［ママ］ケイサク（二宮敬作）の諸氏、その他の本草家から寄せられた多くの強力な寄与に対して、感謝しなければならない。

おかげで、本書中に付けられた和名と植物自体を比定することができるようになり、その大部分を、日本国内において可能なかぎり植物学的に確定することができた。さらなる解決はヨーロッパで付け加えることを希望する。

とりわけ、私とともに既に知られた植物を再検討したイト・ケイスケ（伊藤圭介）は私に大変有益な助手となった。彼の貢献は特大である。

かの高名な C.P.ツュンベリー教授の友であり、私の友人であるデンノジン（茂伝之進）は私の滞在中、この国における私の自然誌研究を支援するために、幾たびとなく心を尽くしてくれた。その心遣いに対する私の感謝の証しとして、彼の手にこの植物目録を渡すものである。

出島　　１８２８年６月１８日
ドクター　フォン・シーボルト

９　伊藤圭介礼状　賀来佐之宛（部分）文政 11 年（1828）11 月下旬

大分県立歴史博物館寄託

一、先達而追々奉願候草木種類名之書、早速御写サセ被下、今便相達申候、千万難有奉存候（…）

一、又御礼申上候ハ、拙者之本草名疏稾本、御校訂之義奉願候処、早速御承引、御深切二一々御教諭被下、万々難有奉存候、且先生ヘモ御見セ、一々校訂出来、誠二僕ノ一大幸也、欣躍欣躍、如高諭、原書ノ和名ハ甚謬誤夥多□□□□□□□□□□□□可申奉存候、先生ヘ御序二小生ノケシカラヌ歓ビ申候事ヲ御話シ、厚ク御礼御伝声之奉事願上候、凡

例抔之義モ一々仔細二教諭、誠二益ヲ得申候、呉々モ小生ノミネールへ御礼申上候位二深ク、御礼御伝可被下候、御願上候、原書作者之肖像モ御贈リ被下、此礼モ千々万々奉拝謝候、必巻初二附刻可仕相娯（後欠）

一、先だって追々お願いしていました草木種類名の書（日本植物目録）、早速小生のために筆写本を誂えて下さり、（十月十日発）今便で届きました。千万有り難く存じます。（…）
一、また御礼申し上げますのは、拙著『泰西本草名疏』稿本の御校訂をお願い致しましたところ、さっそくお引き受けくださり、ご親切に一々ご教示下さいました。万々有り難く存じます。かつ（シーボルト）先生にも御見せ下さり、一々校訂できたのは、誠に僕の一大幸福です。欣喜雀躍しています。ご教諭の通り、（シーボルト先生から贈られた）原書（ツュンベリー『日本植物誌』）の和名は大きな誤りが夥しいと申さねばなりません。おついでのとき（シーボルト）先生へ、（貴殿のお陰で原書の誤りを沢山訂正できたという）小生のケシカラヌ歓びぶりをお話しし、御礼をお伝え下さいますようお願い申し上げます。凡例なども一々詳細にご教諭下さり、誠に益を得ました。小生が「ミネール」（Mijnheer、貴殿）へ御礼申し上げると同じほど深く、くれぐれも先生へ御礼をお伝え下さいますようお願い申し上げます。原書作者（ツュンベリー）の肖像（『欧亜旅行記』口絵）もお贈り下さり、この御礼も千々万々拝謝申し上げます。必ず（『泰西本草名疏』の）巻頭に付刻させていただき、楽しみ（後欠）

10　常用方続編　稿本　賀来佐之著　文政 13 年（1830）　5 月自序

大分県立歴史博物館寄託

題簽に「続常用方　完」とある。書名は巻頭題および自序による。本書は賀来佐之が「矢伊勃児杜」（シイボルト Siebold）、「蒲菖」（ブカン Buchan）、「伊百乙」（イペイ Ypey）、「我爾徳児」（ゴルテル Gorter）など西洋医家の薬方 56 方を選び、門人に教授したもの。

書名の由来は、自序によれば、父有軒が実効ある漢方の処方を選び、「家塾日用調剤」に備えて編集した「常用方」に対して「常用方続編」と名づけたという。収録した全 5６方のうち、シーボルトの薬方が一番多く 20 方をしめる。

佐之は天保 10 年（1839）頃から、恩師帆足萬里の説に従って漢蘭折衷の医方に転じた。天保 13 年 3 月、島原藩医となり、翌年から島原藩薬園の経営に従事した。

11　伊藤圭介書状　賀来佐之宛（部分）天保 2 年（1831) 5 月 13 日付

大分県立歴史博物館寄託

中春二十四日御発之貴墨去月上旬相達拝誦、薄暑之節相成申候処、益御清健可被成御座奉欣抃候小生無変消光御降心可被下候
一第一奉願候者近来本草書三部入御手候由健羨之至候、各三部共拝見仕度、何卒
　　初ノ標題ノ処　壱枚
　　目録
　　本文之処　弐三十枚
右之通乍御面倒御写させ被下置候様伏而奉願上候、最筆耕正申料トモ名疏代中二而御引キ可被下候、此段者偏二所願也

仲春（二月）二十四日ご発信の貴簡、先月上旬に到着し拝誦しました。薄暑の季節となりましたが、益々ご健勝に相違なく、実に欣快に存じます。小生は変わりなく過ごしており、ご安心下さい。
一　第一にお願いしたいのは、最近本草書三冊[ウィルデノウのオランダ語訳] をご入手なさった由、まことに羨望の至りです。各三冊とも拝見したく、何卒
　　始めの標題のところ一枚
　　目次
　　本文のところ二三十枚
右の通り、御面倒ながら筆写させて置かれますよう伏してお願い申し上げます。もっとも、筆写校正料は（売りさばきをお願いしております拙著）泰西本草名疏の代金からお引き下さい。この件特にお願い致します。

12　伊藤圭介書状　賀来佐之宛（部分）天保 2 年 5 月 13 日付
大分県立歴史博物館寄託

一椎氏草木種類名之原書人々御貸シ之処、遂二返シ不申候由、右原書本者ミネール歟余之手ノ外ハ佗人二属スベカラス、必ズ強ク御催促之上御落手候ハ、深秘不可棄人、別本御写置御貸可被成候、小生モ右原書返リ申候ヘハ一度拝借仕度候、文字難字之処校正仕度候、特小生ノミヘハ重而御貸可被下候、右書江戸二モ伝写流布ノヨシ
一右書写サセ可差上被仰下候、然処弊藩蘭学学生無之、筆耕之者無御座、無拠小生写申候、然処多忙中忽卒揮毫故文字難相分、因而ソノ本ヲ小生扣本二仕、先達而崎陽御写サセ之本進上仕候、御落手可被下候、マダ此本ガ文字相分り申候分也、併誤字甚多追々校正仕候得共、猶余りモ有之候哉、御推読可被下候、右ノ訳故筆耕料二者及不申候

一、椎（シーボルト）氏草木種類名（日本植物目録）の原本（❷）を人々に貸与されたところ、ついに返って来ないとのこと。右の原本は「ミネール」（mijnheer、貴殿）か

私を除いて他人が所有すべきではなく、必ず督促の上、ご入手されましたら深く秘し、人に投げ捨てるようなことはいけません。別の写本を写し置いて、それをお貸しなさるべきです。小生もその原本が返されましたら一度拝借したく存じます。文字難字の箇所を校正させていただきたく存じます。特に小生だけに貸して下さいますよう重ねてお願いします。本書は江戸にも伝写本（❺）が流布しているとのことです。
一、本書を写させた筆写本を差し上げるよう仰せ付けですが、弊藩（尾張藩）は蘭学生がおらず、筆耕の者もいませんので、やむなく小生が筆写しました。ところが多忙中に大急ぎで筆をとったため文字が分かりづらいものです。そこでこの筆写本は小生の控本（❻）と致し、先だって貴殿が長崎にて写させ（取り寄せて小生に贈って下さった）た（同封の）写本（❹神田佐野文庫本）を進呈いたします。ご落手下さいますよう。まだこの写本の方が文字が分かりやすい方です。しかし、誤字が大変多く追々校正させていただきました。なお余りもあるでしょうか。ご推読下さいますよう。こういうわけですから、筆耕料については申し上げるには及びません。

13　ウィルデノウ『植物学入門』初版３分冊

Carl Ludwig Willdenow, *Handleiding tot de Kennis der Planten.*
Amsterdam, J.C. Sepp en Zoon. 1818-19. In 3 parts.

日出町歴史資料館・帆足萬里記念館蔵

本書は K.L.ウィルデノウ(Karl Ludwig Willdenow,1765-1812)のドイツ語原書『植物学基礎』（Grundriß der Kräuterkunde.ベルリン、初版 1792、第 5 版 1810）をユトレヒト州農業委員会書記ヘラルト・ウッテワールが編訳したオランダ語訳初版（1818-19）。３分冊で刊行された後、1819 年に改版された（内容は同一）。版元のセップ書店は博物書出版で重きをなした。ドイツ語原書は各国語に翻訳され、標準的な教科書として流布した。

賀来佐之旧蔵の蘭訳初版（稀覯本）は『本草新書』翻訳の底本としてよく使用され、落丁がある。佐之は天保２年（1831）に入手し、翌年正月には翻訳着手を伊藤圭介に知らせている。第２分冊図版 IV の裏に「安政二年卯三月吉日　賀来佐一郎」とある墨書は、恩師の帆足萬里に献呈した際の署名と推定される。

著者ウィルデノウはリンネ植物学を発展させ、植物地理学、植物生理学の成立に貢献したベルリンの植物学者。『C.P.ツュンベリー修正リンネ分類体系によるベルリン植物誌』（1787）で学界デビュー。博物学者・地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトと交友を深めた。ベルリン医学校博物学教授（1798)、ベルリン植物園長（1801)をへて、1810 年、新設ベルリン大学の植物学教授に任命されたが、職責を果たせず、1812 年、47 歳の若さで病死した。

14　本草新書　賀来佐之訳　７冊

日出町歴史資料館・帆足萬里記念館蔵

ウィルデノウ『植物学入門』の和訳『本草新書』の草稿。原書の序文と本文の各章は全訳された可能性がある。帆足萬里に献呈されたとおぼしきこの伝存本は、佐之自筆本（第３冊・第７冊）と他筆（おそらく門人）の筆写本が混じる。宇田川榕庵『植学啓原』（天保５年刊）に先だって、賀来佐之は天保２年（1831）末から同６年（1835）８月末頃までに翻訳を進めたらしい。伝統的な本草学知識を援用した苦心の訳文は、誤訳が散見されるものの、総じて佐之のオランダ語読解力の高さを示している。

原書は序説（Inleiding)、Ⅰ術語解説(Opheldering der Kunstwoorden)、Ⅱ分類体系(Plantenstelsels)、Ⅲ植物学基礎(Grondbeginselen der Plantenkunde)、Ⅳ植物の名称(Namen der Planten)、Ⅴ植物生理学(Physiologie)、Ⅵ植物の病気(Ziekten der Planten)、Ⅶ植物の歴史地理(Geschiedenis der Planten)、Ⅷ植物学史 Geschiedenis der Wetenschap)の各章、ラテン語学名索引、人名索引からなる。この訳稿の構成を原書の各章題に対応する篇名で示せば、Ⅰ「部分名疏」、Ⅱ（訳稿欠)、Ⅲ「論植物本原（植物本源論・植物本原論)」、Ⅳ植物の名称（訳稿欠)、Ⅴ「植物解剖篇」、Ⅵ「論植物疾病」、Ⅶ（訳稿欠)、Ⅷ（訳稿ほぼ欠、断章のみ存）となる。

将軍侍医桂川甫賢は佐之の『本草新書』翻訳に先だって、文政 11 年（1828）に、ドドネウス『草木誌』（1618,1644）の標題紙に見える著者ドドネウスと協力者クルシウスの肖像に関連して、ウィルデノウ原書のⅧ植物学史から両植物学者の伝記を訳出している。この翻訳には甫賢とシーボルトの親密な交流がうかがわれる。佐之旧蔵のウィルデノウ原書はシーボルトの所蔵本であったかもしれない。

15　本草新書巻之三　論植物本原　百四十七章

日出町歴史資料館・帆足萬里記念館蔵

【翻刻と注】

本草新書巻之三　論植物本原（→植物学の基礎 Grondbeginselen der Plandkunde）

百四十七章

植物ノ真の学ハ植物を整列し又之を区別し又之に各称を下す為の法（ウイセ）なり（→下す方法 wijze に依存している)。○曰整列、曰区別、曰各称、皆其始自然の理に依らざるべからざる規則の確徴あるもの（→確立した規則 vastgestelde regelen）に由る。○之を整列する法はこれを序次法（ステルキュンデ）（→ステルセルキュンデ、分類法 Stelselkunde）と名く。前編に挙たる区別を以て之を為す。○何れの法を以て区別すといへとも今因らざるべからざるものあり。○即精密なる法語（キュンストウールデン）の各称（ベナーミング）の学（→植物学用語法 Terminologie, de benoeming der Kunstwoorden)と其法語穏当なる法則を用しと、植物の造質（→構造 maaksel）より

取り来る規則（レイゲル）を用ゆる等の事、殊々之に属す。○其学（ケンニス）は花を精密に研究し、及多の植物を観察する（→植物を多方面から観察する veelvuldige beschouwing der Plant）に由て之を得たり。○花を精密に研究するを序次法（メトーデ）(→分類 Methodus, Stelsel）と名け、多くの植物を観察スルヲ外形（ステルレン）（→ハビトゥス Habitus または外形 uitwendige gedaante）観察法と名く。○植物の序次は之を花及其内面の造質（→構造 maaksel）に従つて之を為は固より本草家（→植物学者 Plantkundigen)の事業に属す。外形を観察するは唯序次のなし易を助るのみ。外形を観察するは本草家の棄て講せざるべからざるもの也（→決してこれだけに依拠してはならない een Plantkundige moet zich op dezelve nooit aleen verlaten）。

16　本草新書　部分名疏　第八章・第九章

日出町歴史資料館・帆足萬里記念館蔵

【翻刻】

第八章　○総テノ植物ノ根ニ二ノ大区別アリ。一云下行スルモノ、二云上行スルモノ、或ハ又中行スルモノアリ。

第九章　○其上行スルモノハ植物ノ根下ニ向フモノヲ云。多ノ植物ニ於テハ地中ニ向テ行クモノアリ。或ハ其資テ以テ生スル所ノ者ノ上ニ坐生ス。「ウイレン」及ヒ蕪菁ノ如シ。或ハ終ニ其資テ以テ生スル所ノ体質ニ入ル宛トシテ消失スルカ如シ。寄生及ロランチュスノ類、是ナリ。

根ノ部分ノ名、左ノ如シ。

挺根　繊維根　毛布根　蕪菁　球根　萌芽根　是也。

【オランダ語原文の逐語訳】

第８節　大抵の植物は目に付くかたちで二つの異なる主要部、すなわち、下降挺幹（Caudex descendens, de nederwaarts gaande stok）、傾上挺幹（Caudex adscendens, de opwaarts aande stok）がある。また、中間挺幹（Caudex intermedius, de middenstok）をもつものもある。

第９節　下降挺幹は植物の下方に向かう部分である。これは大抵の植物では地中に向かう。この部分は植物によっては、海藻（wieren）やいくつかの寄生植物（knolachtige plant-planten, plantae parasiticae）のように、その基部の役目をはたす物体にしっかりと着座している。最後に、少数だが、たとえばヤドリギ（Viscum, Loranthus）などのようにその基部をなす独立体の中に侵入して、その中に姿を消すものもある。

この部分は根（Radix, Wortel）の名称で知られている。根の区分は、根茎（Rhizoma, de Woltelstok）、小繊維（Fibrillae, de Wortelvezelen）、幼根（Radoculae, het Grein）、塊茎（Tuber, de Knol）、球根（Bulbus, de Bol）、根出枝（Soboles, de Woltelspruit）である。

第２部　賀来佐之と伊藤圭介　ー神田佐野文庫資料からー

1-1　ジャワ植物図譜　宇田川榕菴筆彩色図　辻蘭室筆和訳
F.ノローニャ原画　文政元年（1818）6 月頃

オランダの植民地であったジャワ島の博物誌研究はスペイン人植物学者フランシスコ・ノローニャ（1748~1787）から始まった。本図譜はノローニャがジャワ島西部調査中（1786）に描いた植物図 105 図、鳥図４図、由来不明の植物図 25 図からなる。宇田川榕菴（1798~1846）が京都滞在中に、蘭学者辻蘭室（1756~1836）と協力して作成した写本。ノローニャ自筆原画はパリ自然史博物館蔵。幕末に本草家も輩出した京都の地下官人、渡邊家に伝来した。

1-2　ジャワ植物図譜　　ラスサマルラ図（複製）

「ラスサマルラ Rassamalla」は学名 Altingia excelsa Noronha、和名ラサマラノキまたはラサマラソゴウコウ。ヒマラヤ、中国南部、インドシナ半島、マレーシア、インドネシアに分布するフウ科 Altingiaceae の常緑高木。属名 Altingia はノローニャがオランダ領東インド総督 W.A.アルティング（Willem Arnold Alting,1724~1800）に敬意を表して付けたもの。

1-3　ジャワ植物図譜　ラスサマルラ解説　辻蘭室訳（複製）

『ジャワ植物図譜』の植物図 17 図には辻蘭室の筆跡でオランダ語の解説文と和訳がある。これらの解説文は内容的にパリのノローニャ自筆本、ロンドン写本、ベルリン写本に見られない独自のもので、ノローニャのラテン語またはスペイン語の解説文を、おそらく日本人のために蘭訳したと推定される。蘭訳者は不明。辻蘭室は独学でオランダ語を学び、オランダ語文法を研究した。

【釈文】
ラスサマルラ
　暦数一千七百八十六年十月十四日、爪哇国ポンデュクキイといへる所の山址に於て、此樹の大なるものを見たり。其周圍大なること大伽藍の如く、数十丈量べからず。岑々として雲中に聳へ、其樹の正直なること梢より垂準を下たるが如し。周木枝条なく、樹

の頂に葉聚り、叢生して円形を成し、其繁茂綿密なること宛も作り成せるが如して、衆鳥爰に栖宿す。土俗これを奇木とす。

爰に図するは其嫩枝、花実満盛のものなり。雌雄の二種あり。紫花なるものを雌とし、黄花なるものを雄とす。黄花は枯落して実を成さず。雌木は子実を結ぶ。Ｇは実なり。中にＢの双核あり。Ｃは其一核なり。Ｄは核中の仁なり。甚美味にして珎果とす。Ｅは種子なり。Ｆは実中の双核を包む薄皮なり。

【オランダ語解説の逐語訳】

これは巨木である。その一本を一七八六年一〇月一四日、ポンデュキユの高山の麓で見かけた。目の前に現れた大きさといったら、この世にこれほど大きい木があろうとは信じられないほどだった。その太さはまるで塔の側にいるようだった。樹皮は白色がかっていた。恐ろしいほどの高さは、まるで雲の中に糸を天辺までまっすぐに張ったようで、脇に一枝もなく、沢山の大鳥が巣作りをする見事な丸い樹頭のようだった。ジャワ人はこの木を珍木として大事にしている。

ここに描いた枝は開花した小ぶりの木から切り取ったもので、赤紫の花は実を付ける雌花であり、黄色の花は交配が終わると落下する。実はたいていここに図示したように小さく、Ｂは二重の実、Ｃは一重の実、Ｄはその中の実で、大変美味しく食べられる。Ｅは種子、Ｆは二重の実の皮、Ｇは皮の付いた実の全体である。この木の材はここち良い香りがあり、刺激的であるが、常に乾いていない。

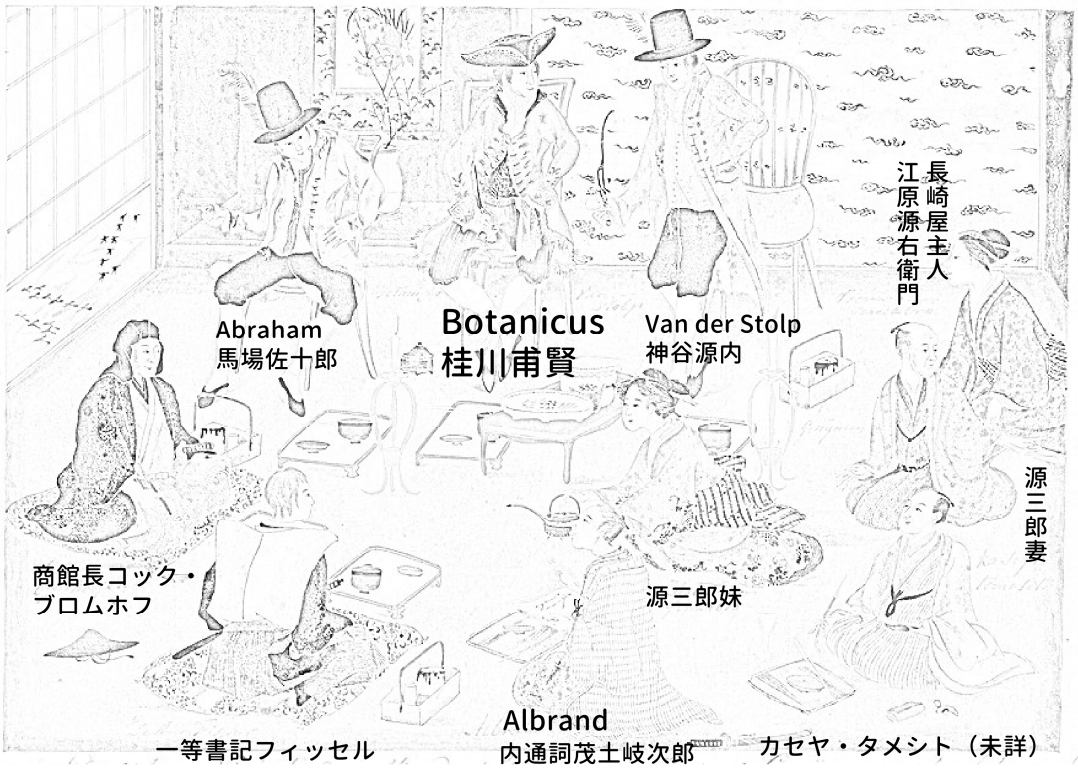
2-1　長崎屋宴会図　桂川甫賢筆　紙本着色　1822 年
商館長ブロムホフ遺愛品

日本橋の長崎屋は例年、将軍拝礼のため江戸にやってくるオランダ商館長一行の定宿であった。本図は将軍家侍医・蘭学者で本草に詳しく、画才のあった桂川甫賢（1797~1845）が文政 5 年 2 月 27 日（1822 年４月 18 日）に長崎屋の２階広間で開かれた仮装宴会の模様を描いたもの。甫賢自筆の蘭文と署名は以下の通り。

Den 27ste van Niguats op malkander plaisieren in Hospes /Genijmonnsche huis in Jedo — A^{o}= 1822. / Afgetekend door / W: Botanicus of Caneel Rivier junior.

(2 月 27 日江戸の旅館主人源右衛門宅における交遊の際 1822 年　W.ボタニクスまたは桂川ジュニア画）（朱文長方印：国寧）

2-2　長崎屋宴会図　人物名一覧



2-3　長崎屋宴会図　桂川甫賢自画像（拡大）

本草学に通じていた甫賢は、商館長ブロムホフの前任者ヘンドリック・ドゥーフ（1803~1817 在任）から蘭名 Wilhelmus Botanicus をもらい、この自画像にも Botanicus と書き入れた。Botanicus はラテン語で植物学者を意味する。ドゥーフの証言によれば、甫賢はオランダ領東インドの自然研究機関「バタヴィア学芸協会」（1778 年創設）の初代会長・博物学者カール・レインワルトとオランダ語で文通。文政 9 年（1826）に同協会の通信会員となった。また同年、江戸に滞在中のシーボルトに、小野蘭山・島田充房『花彙』（1759~1765）のオランダ語訳増訂自筆稿本を献呈した。

2-4　【解説】長崎屋宴会図に描かれた人々

オランダ商館長一行は文政 5 年(1822)2 月 5 日 （陽暦 3 月 27 日）に江戸に到着し、 2 月 15 日 （4 月 6 日）に将軍拝礼を終え、その後長崎屋で蘭学者の桂川甫賢、大槻玄沢、宇田川玄真、高橋作左衛門らと交流。2 月 30 日（4 月 21 日）の江戸出発を前に、洋装と和装を違えた仮装宴会を楽しんだ。

洋装の日本人 3 人のうち、左端の Abraham はオランダ通詞から幕府天文台に抜擢された蘭学者馬場佐十郎貞由、36 歳。出島のオランダ人からそう呼ばれていた。文化 5 年(1808)4 月頃から天文方手代として高橋作左衛門景保のもとで翻訳に従事していたが、激務と酒癖のため、この年死去している。

中央の Botanicus は本図の作者桂川甫賢、26 歳。ビーバーの毛皮製三角帽をかぶ

り、刺繍飾りのある濃紺のヴェストの上に、やはり刺繍飾りのある赤いコートを着る。コートは腰下にスリットがあり、裾の先が椅子の両腿の間からのぞいている。首には白い襟巻。胸元にはジャボ。コートの前腕部は大きな草模様の刺繍があり、両袖口には白いレースのフリル。縦縞、緑色の半ズボン、刺繍模様付きの白い長靴下、屋内用のピンクの上履き、という出で立ちである。

右端の Van der Stolp は中津藩主奥平昌高（1781-1855）の側近神谷源内弘孝（ひろよし）。馬場佐十郎の協力のもと、我が国最初の日蘭辞典『蘭語訳撰』(1810）を編集刊行した。

黒紋付の羽織に袴をはき、頭巾をかぶったオランダ人はコック・ブロムホフ商館長、43 歳。

手前に背を向け、薄茶色の肩衣と青色の袴からなる継裃を着て、短髪の若いオランダ人は芝居好きの一等書記ファン・オーフルメール・フィッセル、22 歳。日本人 3 人の洋装は甫賢が家に伝わった帽子、衣服、靴などを持ち込んだが、流行の時代が異なり奇妙だ、と回想記に記している。

画面中央で給仕している「ゲンザブロウの妹」とその兄は不明。その背後の「ゲンエモン」は長崎屋主人江原源右衛門、推定 47 歳。「ゲンザブロウの妻」、画面右下の「カセヤ・タメシト」（笠谷為人か）も不明。

画面手前中央に座る日本人 Albrand は商館長一行に随行して江戸に来た小通詞並・茂土岐次郎（しげ・ときじろう）であろう。土岐次郎は商館長ドゥーフの蘭和辞典編纂に協力した有能な通詞。その父、茂伝之進は本草知識があり、ツュンベリー、シーボルトと交流した。

【参考写真１】
小野蘭山・島田充房『花彙』蘭訳　桂川甫賢増訂自筆稿本　1826
Source: The Siebold Archive, Faculty of East Asian Studies, Ruhr University Bochum, Germany ; shelfmark 1.294.000

小野蘭山・島田充房著『花彙』8 巻（1759~1765）は草木 200 種の解説図譜。この桂川甫賢の自筆稿本は 1826 年、江戸滞在中のシーボルトに甫賢が献呈したもの。ルール・ボーフム大学東アジア学部所蔵シーボルト・コレクションに伝わる。

表紙の上段中央、楕円形題簽の朱書き
QUA-JI,/VERZAAMELING / Van/ PLANT: & GEWAS:
（花彙または草木集、の意味）

裏表紙見返し遊紙の献辞

Aan / De Weled: Heer / Dr: von Siebold / van / zijn / Goede Vriend / Dr:KR: WBotanicus [Kaneel Rivier Wilhelmus Botanicus]. 1826.
（ドクター・フォン・シーボルト貴台へ　良友ドクター桂川 W ボタニクス）

【参考写真２】
小野蘭山・島田充房『花彙』蘭訳　桂川甫賢増訂自筆稿本　1826
Source: The Siebold Archive, Faculty of East Asian Studies, Ruhr University Bochum, Germany ; shelfmark 1.294.000

朱書きの序文末尾のサイン
Kaneel Rivier junior / W: Botanicus
（桂川ジュニア、W ボタニクス）

朱書きの「前書き」（Voorrede)によれば、商館長イサーク・ティチング（1779~1780, 1781~1783 在任）が阿蘭陀通詞仲間に解説文のみを下訳させ、みずから校正したオランダ語訳は、第 8 巻が未訳。訳文に遺漏も目立つので、さらに訂正増訳したという。

***3*　勾玉考　伊藤圭介著　1828（複製）**
Beschryving van de Magatama of buigende iuweel. Door MD. DR. I. Keiske. MDCCCXXVIII.　（『施福多先生文献聚英』1936 第 6 冊）

シーボルトはオランダ語作文能力のある門人に、日本の物産や医学に関するオランダ語レポートを課した。伊藤圭介は文政 10 年（1827）年 9 月 9 日に長崎に到着し、翌日から出島オランダ商館で、シーボルト、賀来佐之、岡研介とともに「日本植物目録」の編纂を開始した。長崎ではこの事業のため多忙であったず。「勾玉考」の執筆と提出は、翌年春、名古屋に帰郷後のことであろう。
門人のオランダ語リポートは、他に「紀州産鯨について」（岡研介）、「日本古代史考」（美馬順三）、「日本における茶樹の栽培と茶の製法」（高野長英）、「日本疾病志」（高良斎）、「灸法略説」（石坂宗哲）などが伝わる。

***4-1*　シーボルト蘭文書簡　表（複製）**
賀来佐一郎（佐之）宛　1828 年 9 月か

***4-2*　シーボルト蘭文書簡　裏面**
賀来佐一郎（佐之）宛　1828 年 9 月か

Vriend Saitsi

Ik ben zeer bedroefd, dat ik myne brave Leerlingen niet meer kan ontmoeden[sic] en vooral ook U. Ik hoor U wil in korten vertrekken, om die reden zend ik U deze brief. Gelieve wel zorg te dragen dat klaar komt de Lyst van gewassen, waarvan ik 14 boeken heb ontvangen. Waar zyn de anderen? waar is de Verklaaring, waardoor ik kan alle Letteren verstaan? Gelieve aan overbrenger alles te spreken en aan hem afgeven.

Ook verzoek Kruidkundig worden [sic:woorden] boek van I. Keiske verbeterd by zeker man te zenden, om my te schikken. Ik zal alle beloofd medecynen[sic:medicynen] en bataviaasche Gewassen aan een Seker vriend bewaren en U zal ongetwyfeld ontvangen — neem hier mynen grooten dank voor de veele moeite, die U heft sedert gedaan, wees versekerd dat ik nooit zal vergeten en zoo ras ik gelukkelyk heb myn vaderland wedergevonden, zal ik zoo lang ik ook mag leven altoos voor myne brave en opregte leerlingen zorg dragen en van Holland hunne Liefde tot wetenschappen bevorderen.

Eeuwig U opregte

Vertrek niet bevoor[sic:bevorens] myne werkzaam meester VonSiebold heden zyn afgelopen, ik verzoek zeer vriendelyk. 1828.

友人サイチ(佐一郎)へ

立派な教え子たち、とりわけ貴殿にも、もう会えなくなるのは悲しい限りです。貴殿がまもなく出発すると聞きましたので、この手紙を送ります。植物目録はノート 14 冊分を受け取りましたが、どうか努めて目録を完成させるようにして下さい。他のノートはどこにあるのでしょうか。私がすべての文字(漢字・仮名)を理解できるようにした解説はどこにありますか。遣いの者に委細を話して、彼に渡して下さい。また、イ・ケイスケ(伊藤圭介)の植物学辞彙の改訂稿を私の手に渡るよう、確かな人に送って下さい。約束した薬とバタヴィアの植物は誰か友人に託しますので、貴殿は間違いなく受け取れるはずです。

これまで大変お世話になり、誠にありがたく感謝致します。(貴殿のことは)決して忘れませんのでご安心下さい。幸いにも祖国を再び見ることができたら、すぐに、そして命のある限り、立派で忠実な教え子たちのことを思い、オランダの地から、学問に対する彼らの情熱を促進するようにします。

永遠に貴殿の誠実なる師

フォン・シーボルト

深い友情からのお願いです。私の仕事を終える前に出発しないように。 1828 年

4-0 【解説】

伊藤圭介はシーボルトに請われて、文政 10 年（1827）9 月 4 日に長崎に到着し、通詞吉雄権之助宅に寄宿。翌日から出島オランダ商館に通い、故郷名古屋からもたらした

1600 種以上の植物標本をもとに、塾頭岡研介の通訳により、兄弟子の賀来佐之とともに、シーボルトの「日本植物目録」編纂に協力した。佐之は筆記役を引き受けた。

ところが、圭介は半年あまり長崎に滞在したあと、両親の介護のため、やむなく帰郷。そこで、シーボルトはもっぱら「サイチ」こと佐之（佐一郎）を頼りにした。1828 年 6 月 18 日(陰暦 5 月 7 日)までに学名と和名の欄はほぼ完成したようである。その後、漢名を付ける作業の途中でサイチが突然、帰国すると言い出したため、シーボルトは急いでこの督促状を書き送った。帰国予定日の同年 10 月 1 日（陰暦 8 月 23 日、コルネリス・ハウトマン号の出帆予定日）以前に書かれたものであろう。シーボルトの日本植物研究の実態と賀来佐之の知られざる貢献を伝える貴重な史料である。

この書簡は賀来佐之が架蔵のシーボルト編「日本植物目録」の写本を他人に貸して失ってしまったため、圭介が天保 2 年（1831）5 月 11 日付けで佐之に贈呈した写本 Naamlijst van Japansche gewassen（日本植物目録、5-1）に挿入されていた。本学日本研究所長、町田明広先生が 2014 年 12 月に、附属図書館の若林正治コレクション（のち神田佐野文庫の中核となる）を整理中に発見された。

5-1 Naamlijst van Japansche gewassen (日本植物目録)
伊藤圭介・賀来佐之録　文政 11 年（1828）10 月写か 書写者不明

遊紙裏に伊藤圭介筆「尾張　伊藤舜民戴堯／＜佐＞賀来佐之公輔／仝録」の墨書がある。圭介が文政 11 年（1828）年 11 月末頃、この筆写本を受領した際に書き入れたらしい。

5-2 Naamlijst van Japansche gewassen (日本植物目録)
見返し遊紙　（写真）

5-3 Naamlijst van Japansche gewassen (日本植物目録)
後見返し　(写真)

5-0 【解説】

文政 11（1828）年春、伊藤圭介はシーボルトからツュンベリー『日本植物誌』（1784）を贈られ、名古屋に帰郷。半年後、それをもとにリンネの 24 綱分類法を紹介する『泰西本草名疏』（翌年 10 月刊）を準備する。そのため、学識を尊敬していた盟友の佐之に、その稿本の校訂を依頼するとともに、シーボルト編「日本植物目録」の善良本の送付も懇願した。佐之はこれに応じて、この筆写本 Naamlijst van Japansche gewassen.（日本植物目録）を長崎で誂え、同年 10 月 10 日付けの便で伊藤圭介に発送した。受け取った圭介はこの目録のお陰で、ツュンベリー説を改訂できた。

本筆写本の見返し遊紙には、天保 2 年（1831）5 月 11 日付けの献辞「**呈／公輔賀来盟兄／赭鞭畔／尾張　伊藤舜民／拝具／辛卯榴月十又一日**」の朱書、また裏表紙見返しに蘭文書名「**Naamlijst ／Van／Japansche ／Gewassen.**」の朱書、その遊紙には「**此写本追々校訂仕候得共、猶誤字多シ、名疏等二而相分申候分ハ御訂正可被下候**」の朱書がある。これら伊藤圭介の朱書は、賀来佐之が手許で大切にしていた「椎氏草木種類名之原書」（シーボルト氏の日本植物目録の原書）を他人に貸して失ってしまったため、圭介が**同年 5 月 13 日付けの書簡（写真パネル 12）**に同封して、佐之に進呈した際のものである。

佐之は、戻って来たこの大事な筆写本に、3 年前シーボルトから届いたオランダ語の督促状を挿入して、出島での「日本植物目録」編纂の記念としたに違いない。

6-1　薬名アベセ引・コンストウォルド　伊藤圭介旧蔵

書写者不明。本書は緒方洪庵の師であり、原書講読を重視した坪井信道塾の学風を伝える。幕末蘭学塾で作成された薬名・術語集のなかで最も流布した。2 部に分かれ、前半「薬名アベセ引」は坪井信道塾生編、宇田川榛斎等校閲。天保元年（1830）成立。天保 5 年（1834）書写か。

蘭文タイトル「Latynsche, hollandsche en chinesche, Japansche namen der geneesmiddelen verzameld door Leerlingen in tuboi, en herziend door W.d.G. sinzai, enz, Te edo, tenpo jaar 5.」は「羅蘭漢和薬名集　坪井塾生編　宇田川榛斎等校閲　於江戸　天保五年」の意。

6-2　薬名アベセ引・コンストウォルド　伊藤圭介旧蔵
コンストウォルド内題（写真）

後半の「コンストウォルド」（題簽）は三尾謙造編、緒方三平(洪庵)増補、天保 5 年（1834）年成立。書写者不明。

蘭文タイトル「Verzameling van de kunstwoorden, Betrekkelyk de geneesmiddelen, door M.O. kenzoo en daarna verbeterd en zeer vermeerderd, zelfs alphbabetisch gerangschikt door O.G. Sanpy. te edo, tenpoo 5.」は「医薬関係術語集　三尾謙造編・緒方三平[洪庵]改訂増補　アルファベット配列　於江戸　天保五年」の意。

7-1　万宝叢書洋字篇　伊藤圭介著刊
天保 12 年（1841）　尾張　花繞書屋蔵版

表紙中央に題簽「＜万宝叢書＞洋字篇　全」。表紙に「伊藤篤太郎」印（朱文方印）および「錦窠伊藤圭介先生著　著者蔵本」との朱書がある。見返しの扉題に「錦窠先生著　伊藤圭造・西村良三　同校」とあり。1オに「尾張伊藤圭介之記」印（朱文方印）。

伊藤圭造は圭介の長男。西村良三は洋学者柳川春三（しゅんさん、1832~1870）の旧名。伊藤篤太郎(1866~1941)は伊藤圭介の門人、植物学者。圭介の女婿・内科医・伊藤延吉の子。祖父圭介の顕彰に尽力した。

7-2　万宝叢書洋字篇　伊藤圭介著　（写真）
天保 12 年（1841）　尾張　花繞書屋蔵版

最終丁 11 ウに「尾張伊藤圭介之記」印（朱文方印）。後見返しに「不出門閫／尾張洋学館蔵書／厳禁貸売」印（朱文方印）および「伊藤篤太郎按二／尾張洋学館ハ尾張上田帯刀（タテワキ）（仲敏）／花繞書屋ハ伊藤圭介／西村良三ハ後チ改名シテ柳川春三／ト云フ」との朱書がある。国学者の上田帯刀（仲敏、1809~1863）は柳川春三の師。蘭学・西洋砲術を研究し、伊藤圭介と協力して自邸に蘭学塾洋学堂を設立。尾張洋学館（安政 6 年 1859 創立）の総裁となった。

8　改正増補蛮語箋　箕作阮甫編　伊藤圭介旧蔵
嘉永元年（1848）謙塾刊　２巻

森島中良（桂川甫斎）編『蛮語箋』（『類聚紅毛語訳』1798）は便利な日蘭分類語彙として版を重ねたが、オランダ語がカナ書きであった。アヘン戦争後のオランダ語学習の高まり、西洋砲術流行に答えて、蘭学者箕作阮甫が、これをオランダ語原綴りに直して出版した増補改訂版。

巻一見返しの扉に「嘉永紀元戊申晩春／＜改正増補＞蛮語箋／謙塾刊行（白文長方印：箕作氏家蔵）」。巻二の跋文を寄せた小山陶三径は、のちにペキサンス『仏海軍ボンカノン砲実験』蘭訳（1835）を翻訳し、『百機撒私』（安政 2 年刊）を著した。

巻一に「十二花楼　伊藤延吉」「尾張伊藤圭介之記」（いずれも朱文方印）、巻二の表紙に「尾張伊藤圭介之記」印、後見返しに「呉服町一丁目　伊藤圭介」との墨書がある。

9　輿地紀略　伊藤圭介蔵板　安政 5 年（1858）刊

伊藤圭介がオランダ語教科書として復刻した世界地理書。表紙は洋風に改装。改装後の表紙に刷り題簽（中央）「地学訓蒙／輿地紀略／GEOGRAPHISCH／ZAKBOEKJE／VOOR DE ／NEDERLANDSCHE JEUGD, OF KORTE BESCHRIJVING VAN ／DES

GEHEELEN ／AARDRIJKS.」（破損部分の文字を補筆）（オランダの青少年用地理小本または世界地理略説）を貼付する。表紙見返しに「GEOGRAPHISCH／ZAKBOEKJE／安政五年戊午新春開雕／輿地紀畧／尾張　伊藤氏花繞書屋蔵」（破損部分の文字を補筆）とある。後表紙見返し「尾張　伊藤圭介蔵板　発行書肆　名古屋　永楽屋東四郎・菱屋藤兵衛　江戸　岡田屋嘉七」。

原書は、Geographisch zakboekje voor de Nederlandsche jeugd, of Korte beschrijving des geheelen aardrijks. Derde druk. Leyden, D. du Mortier en Zoon. 1823.

10　モスト内科書目録　伊藤延吉写　書写年不明

伊藤延吉は伊藤圭介の女婿・内科医。小口に「モスト内科書目録」の墨書がある。幕末によく利用されたモスト『実用内科・外科・産科百科事典』（G.F. Most, Encyclopedisch woordenboek der practische genees-, heel- en verloskunde. Amsterdam, 1835-1838. 7 vols.）の目次を抜き書きし、訳語を付したもの。「尾張伊藤延吉之記」印（朱文方印）あり。

遊紙裏に大正 10 年 8 月 30 日付け、伊藤篤太郎の朱書がある。曰わく、「此書ハ余が実父欅堂伊藤延吉君ノ復写ニ係ル、君ハ家君父伊藤圭介先生ノ門人トシテ、後先生之養子トナリ、医ヲ業トシ尾州名古屋七間町二丁目ニ住居ス、老後東京ニ来リ余ノ家ニ在リ、明治四十二年六月二十三日小石川区林町ニテ歿ス、時齢六十有八、大正十年八月卅日東京市外瀧野川町東三軒家ノ植物研究所ニ於テ、理学博士伊藤篤太郎記ス」。

【参考文献】

『愛知県史　資料編 20 近世 6 学芸』（2012）
鳥井裕美子（1997）「賀来佐之研究序説ー洋学の展開と近代化の一考察」『開国と近代化』（中村質編、吉川弘文館）
遠藤正治・鳥井裕美子・松田　清（2016）「神田外語大学附属図書室館所蔵シーボルト編伊藤圭介・賀来佐之録『日本植物目録』について」『神田外語大日本研究所紀要 8 』
遠藤正治・加藤僖重・鳥井裕美子・松田清（2016）「シーボルト編『日本植物目録』改訂稿について（上）」『鳴滝紀要 26』
遠藤正治・加藤僖重・鳥井裕美子・松田清（2017）「シーボルト編『日本植物目録』改訂稿について（下）」『鳴滝紀要 27』

（文責　松田　清）

シーボルト来日 200 周年記念　神田佐野文庫企画展
賀来佐之と伊藤圭介―二人の門人―　展示目録

編集　　松田　清
発行日　　2023 年 12 月 12 日
発行　　神田外語大学附属図書館
〒261-0014 千葉市美浜区若葉 1-4-1
Tel.: 043-273-1192　Fax: 043-275-2783
E-mail: libraryoffice@kanda.kuis.ac.jp